

「済みません」消え入る様な聲で、壽江は袖に顔を埋めて始終泣いて居た。

「済みませんでは済まんぢやないか：あ、私は悔くしてならん、只つた一人のお母様の死目にも遇はれず、樂みにして居つたお前まで恁んな汚れた身になつて、あゝ薩張り精も抜けて了つた」獨言ちて「壽江私はお前に頼みがある聞いてくれるか」

「はい、妾に適ひます事ならば：」
「ぢや、聞いてくれるのか、今迄の不孝の罪は皆免しやるから、何うか香山と縁を切つて呉れ」
「はい」蒼冷めた面を僅かに壽江は擡げた。

「はいぢや解らん、明瞭と答へて呉れ」和三の兩眼は爛れた。

「はい一聲は稍々震へを帯びた、

「こら壽江ッ、明瞭答へんとすると、愈々離縁れんと云ふのぢやな、彼様な奴に未練があるのか、香山を河んな奴だと思つてるんだ、私のお父様の時には充分厄介になつて置き乍ら、何うだ、亡くなられた後は振り向きもせず、お父様が汗水で建てられた家も庫や失くなり恁んな貧しい目を見るのも、皆んな香山の爲業ぢやないか、其様な非人にお前が縁付いて、お父さんの

顔が立つと思ふのか、世間へ對して面目が無いぢやないか：だから私が頼んぢや、何うか離縁して呉れ、えッ、返事をしてくれないか、壽江：「情に激した兄の聲もだん／＼と震へを帯びて、止度もなく涙は頬を傳ふのであつた。」

「兄さん、何卒お免し遊ばせ：お言葉に叛くやうですけれど是れ文けは何うしても：」壽江はペンチを迂り落ちて、わつと斗りに泣き伏した。

「切れひと云ふのか、馬鹿ッ、勝手にせよ、私は一時も恁んな所に居たくない、さつさと北海道に歸るわ、罰は眼の前だ、馬鹿ッ」和三は憤然と怒りの色を漲らして、衝と塲を蹴つて起つた。

「兄様、些：些とお待ち遊ばせ」袖を振り拂つた兄に追ひ縊らんと壽江はその跡を追ふた。

「もうお前に用はない、お前は今から私の妹ぢやないぞ」

「でも暫らく」辛うじてその袖を捕まへた。
「えッ、放さむか」捕まへた袖を無理に放して一散に走つた、壽江は別に追ふともせず倒れたまゝ其處に泣き伏した。
夜は益々更け渡つて月は益々明かた、亂れたる壽江の

姿を照らした。

「と一聲汽笛がなつたと思ふと、楔發の終列車が出た響がさこえた、壽江はつと起ち上つてその方を瞞めたが、月に眼を移して又滂沱と涙を流した。(完)

お手本はそこいらにあらうとは思はれるが、構想も単純ながら短篇にふさはしく、なか／＼手際のおさやかな作物である(選者評)

俳優のむすめ

農夫(選外) 金澤 森 清子

岩代 服部 水仙子

「ぢやあ如何しても退學なけりやならないの?」

「え、中途で退學するのは眞實に残念ですけど：仕方が無いわ：」

「と投げやる様に言つて擬乎と行手に架まつてる石橋の上を低う飛んでゆく燕の行方を見成りながら、悻と幽かな溜息。年は十八の色白く髪黒く、級中切ての美人の君子。何の俳優の娘かと岡焼連の陰口時に寄つては面と向つての嘲笑に、いつも其活々とした眼に涙を含めるのが常であつたが、其眼の今日はいつになく打沈むては居ながら、何事か決心の影が現は



れて居る。

「自分ぢやこんなことに成らうとは思つてやしなかつたのですがお父が思ひ掛なく彼處ことになつてしまつて：え、腦充血でしたの、私眞實に如何しようと思ひましたわ、倒れて室へかつぎ入れられた時、私を枕許に呼んでね父が後を繼いで呉れ、然し品性を高潔になつて一言讀みかけた脚本を持つた儘、その儘なんてすの：私泣きましたわ、だつて口惜しくつて切なくつて：どうしても自分

は俳優にならなけりやならないのかと思ふとつひ情無くなつて：」

「ただど：」と文子は何か言はんとしたがおさで適當の言葉が無いらしく其儘黙つてしまつて、海老茶の袴を蹴つて出る君子の靴と自分の赤い鼻緒のつま先とが言ひ合さずに揃つてゆくのを見つめて居る。

右手の小高き岡なる瓦焼きの煙りが一際むらがり出て向ふの杉から放れた烏三羽、薄煙の中を飛んでゆく。

「だけどねを文子さん!私決心しましたの、何の俳優

だとして聴づることがありませう、多少世に知られた父の後を繼いで立派に舞臺の上で働いて見せませう、私のお友達に嘲笑れて蔑視されて、悲しかつたのは未だ藝術の美を認めなかつたんですわね、品性さへ高潔なら、操行さへ確かなら、何の恥づる事がありませう……もとより俳優の娘が……我と我を勵ますやうに言つて、お召の矢羽根の胸を張らして、青葉の下道を駈さずにしたオリブ色の洋傘をつと廣げて文子へとさし掛けた。

「それでね一昨日で父の百ヶ日も終へましたし、學校の方も決定つきましたしするからいよく劇界に身を投じる積りですの、まあ暫くは東京に居りませせん、もと父の門弟でした杉山の一行が明後日、東北地方に参りますのでそれに加はつてね……暫く過はれないわ」

「えつ、じゃあ明後日……?」

「は、それで分日はお暇乞ひかたぐい参りました譯ですの、文子さん! 長々貴女にお世話様になつてねえ、俳優の娘として何誰も合手にして呉れない私を貴女一人は……よく今まで交つて下さつてね、私感謝しますわ、文子さん! 此後ともね……」

洋傘の柄の房を結んで解き結んで解きして居る文子、君子の顔を覗めて居る。君子は目隠した。車はさよと遠くへ……

此作者の寄稿は讀まない先から、胸の躍るを禁じ得ない、俳優の娘とは一寸眼先が變つて居る、終りが殊に勝れて居るやうだ(選者評)

雪解 青森 庄司登茂子

(上)

「秋信は歸りませんか」と、姑の間に「ハイ」と、許り二の句は繼げぬ夫人俊子、嫁ぎ参らせた時は、御優しかつた秋信様、如何被成た事か此の頃の御身持、聞けば昨日も、御役所には御出仕しに成らず、阿嬌な女と合乗りて、濱町の方へ車を飛ばされたとか、お梅がまた聞き話、偶に御歸宅に成ればとて、あられも無い口三味線の酒機嫌「俊子雨シヨボても踊れ、踊らぬかお前は良夫の言附をきかんか」と、まあ何として夫れも肩を揉めとか、琴なりとの仰せ付けなれば、如何様にも致さるよふなれど、此れはまあと遂、無言で打向けば「泣いて居るのか、亦御母様との喧嘩か面白ふ無し」との御出かけ、其御羽織にてはと御召を替れば、チラリと落ちる紅の筆、それを噛みしめて空間に、泣き明かしたも幾度、其折々に姑様の「又秋信はお出かけか」と、勿躰無事乍ら邪慳御白眼其度毎に小さい胸

女子文壇 第貳卷第拾壹號

短篇

小説

—(11)—

子の手を取つて強う握りしめた。
「え、お互に……でも明後日なんてまあ」
「二年ばかりはお目にかゝらない積り、文子さんお健かにね、他日貴女にお目にかゝるのは、それは舞臺の上ですわ、私の初舞臺には是非……は東京です」
「その頃は私も學校が卒業ますから必と故郷に居るやうになるでせうよ」

道の兩脇の麥畑に仕事して居る人達に見送られて二人は松並木に出た。その並木のはづれの葺屋根造りの家の前には人力車が一輛休んで居る。
「文子さん、もう此所までよくつてよ、後は車でまゐりますから……如何も有難う、お父様やお母様に宜しくね」

「じゃあ君子さんあなたの成功するのを私、待つて、まあお父様の遺言を忘れない様に……」
「有難う……さよなら御機嫌よう」

「さよなら!」
車夫は梶棒をとり上げた。
「あ、あのお兄様に……」此時もう車夫は馳せ出したので、君子は口を噤んで凝平と意味あり氣に文子を見た文子もまた何か言はふと口を動かしたが、たゞやは

の、裂けんとしたも數知れず、されど是れも皆、妾の心の足り無い爲めと、實家への便りも、笑つて暮すと許り、偶々實母様のお便りには、秋信様の此の頃の御身持はと、悪事千里の世の中とて、悪い事は知れ易く、何時御耳に入りてかお文の節々、仰せ越さる、其都度、何のお優しう被遊て、左様の事は微塵もありませぬ、何かの御聞き違ひに侍べらんと、御返事申上ぐる時の、辛さ苦しさ、是れも元來、御優しい秋信さま、今に迷ひの夢醒めて、真如の月の影明かに、お成り遊されたら、姑様の御心も解け、今日の悲哀を昔語りの、御睦言もあらんと、一縷な希望を胸に疊みて、今も想を其處に選ばせ居るなり、姑は「ハイ」との返辭に物足りぬ面顔にて「女學生卒業の嫁は懲り升た」と獨言いて、合の襖をハタと音させて閉めた、さはれ俊子には聞え無かつた、昨日の花は今日の青葉と替りて、涼しい庭の若緑、葉面に月を宿して心地宜き微風、夫人の居間の床の燕花に戦ひだ、靜かに更ける夏の夜を、茶の間の時計が恰度十二時、

(下)

阿彌陀寺の鐘が陰に響いて、街區の灯も一ツツに消果ては、瓦斯燈のみ獨り、影あはれに長く、庭の蟲韻